

# 白紙余談

周囲をひたすら激励する『夜廻り猫』という漫画を知っていますか？

◇漫画は子どものころ大好きだった。中高年になり、また時折り手にするようになった。昔と違い、好きな作家や作品は限られるので、漫画を手にするのも年に数冊程度だ。そしてここ2年ほど、よく読むようになったのが『夜廻り猫』（深谷かほる／講談社／現時点で全6巻だが、連載は継続中）という短編集である。

◇『夜廻り猫』の主人公は野良猫の遠藤平蔵。そして偶然の巡り合わせで野良仲間となった子猫の重郎が常にセツトで登場する。この平蔵・重郎のコンビが、世の嘆き悲しんでいそうな人や動物を見つけては「訳を話してみなさらんか」と押し掛けて悲しみの訳を聞いてやり、激励する。それがすでに500話（1話が8コマの短編）以上も続く、この漫画の筋の骨子だ。

◇この漫画を読むたびに、他人には「ささいなこと」でも、本人には「大変な悲しみ（障壁）」になっているような「よしなしごと」が、世の中には人の数だけあるのだということを、改めて痛感する。

◇家族間の、ほんのちよつとしたすれ違い。職場での上司や先輩、同僚たちとの日々の言葉のやりとり。異性間のすれ違い。学校における、教師や友達との小さな感情の乖離、大きな乖離。そうした「隙間」にえてして生じるイジメや無視、それぞれの身勝手。パワハラ、モラハラ、セクハラ……。

◇平蔵と重郎が「大丈夫、おまいさんなら、きつとできる」（平蔵は福島県生まれの作者の内面が投影されているのか、福島なまりが出る）の決めセリフを最後にかけてあげるのは、さまざまな理由から、世の中の生

存競争に置いていかれがちな、人のよい、だからこそ声高に自分を主張できないタイプの老若男女たちだ。

◇作者の深谷かほるさんの故郷は、東日本大震災で大きな被害をこうむった地域であるらしいことが、時折り登場する作者の自身の言葉から察せられる。そのたびに、この作品はもしかしたら、東日本大震災で傷ついた故郷の人々を激励したいという発心が、一つのキツカケになって生まれたのかもしれない、などともおもうのだけれど、そのへんはよく分からない。

◇それはともかくとして、平蔵と重郎が悲しみの訳を聞いてやり、励ましてあげる人たちの像は、我々のごく身近にいる人々の像でもある。時には自分もその仲間になることもあるのかもしれない。逆にそうした人々の悲しみの一因を、もしかしたら、自分自身が知らない間に作っているのかもしれない。そんなことにも、この作品を読んでいると、ふと気づく。

◇規模の大小に限らず、企業にはさまざまな出自、さまざまな性格、さまざまなタイプの人々が集まっている。中には何かと「浮きがち」で、屈託を絶えず抱えがちな新旧の「問題社員」もいることだろう。

◇そうした社員たちの悲しみや屈託の訳を、人生の先輩の立場から「訳を話してみなさらんか」と気軽に声掛けし、最後に「大丈夫、おまいさんなら、きつとできる」と激励してあげるような経営者がいれば、そんな社員も立ち直りのキツカケをつかめるのではないか？

◇『夜廻り猫』を読んでいると、ついそんなことを考えたりする。年末年始に一冊、いかがですか？（E）